

2025年度 卒業生答辞 片山颯太

吹く風にも暖かみを感じ、キャンパスの木々が春の訪れを告げる季節となりました。

本日、私たち卒業生一同は、晴れて神奈川大学の卒業の日を迎えました。

学生生活の締めくくりとなる門出の日に、このような素晴らしい式典を挙げてくださり、心より感謝申し上げます。また、ご多忙の中ご臨席賜りました戸田龍介学長をはじめとする諸先生方、ご来賓の皆様、そしてこれまで私たちを温かく見守ってくださったご家族の皆様に、卒業生一同を代表して厚く御礼申し上げます。

振り返れば4年前、私たちは期待と少しの不安を胸に、神奈川大学の門を叩きました。入学当初の新鮮な景色、初めて受ける大学の講義、そして新しく出会った友人たち。あの日、この横浜の地で抱いた高揚感は、今でも鮮明に記憶に残っています。

1、2年次には、共通教養科目を通じて自らの専門外の知見に触れ、視野を広げるとともに、工学部としての基礎を学び始めました。私が専攻した経営工学は、一見すると数字や数式ばかりの冷たい学問に見えるかもしれませんが、しかし、その本質は「複雑な社会の仕組みを整理し、どうすればより良く動かせるか」を考える、非常に人間味のある学問でした。

慣れないプログラミングや統計解析の課題に直面し、頭を悩ませることもありましたが、バラバラだったデータが一本の論理で繋がった時の喜びは、何物にも代えがたいものでした。こうした日々の積み重ねは、私たちの中に「物事を感情だけで判断せず、客観的な事実に基づいて冷静に捉える力」を養ってくれたと感じています。

3年次になり、研究室に配属されると、学びの舞台は教室からより実践的な場へと移りました。それまでは「答えのある問い」を解くことが中心でしたが、自らの手でテーマを見つけ、試行錯誤を繰り返す中で、正解のない問題に挑む難しさを痛感しました。

研究室の仲間と机を並べ、議論を交わした時間は、単なる知識の習得以上の価値がありました。立場や考え方が違う相手と、一つの目標に向かって意見を調整し、協力し合う。この「人と協力して、より良い形を作り出す」という経験こそが、大学生活で得た最も大きな財産です。

4年次の卒業研究では、これまでの学びの集大成として、一つのテーマに深く向き合いました。思うような結果が出ず、立ち止まりそうになったこともありましたが、粘り強く取り組む中で、先生方からの的確な助言や、共に励まし合える仲間の存在が何よりの支えとなりました。地道な努力がな

ければ、確かな成果は得られない。この当たり前でいて大切なことを、私たちはこの4年間で身をもって学ぶことができました。

4月から、私たちはそれぞれの道を歩み始めます。社会に出る者、学びを継続する者、進む先は異なりますが、神奈川大学での学びによって得られた力を活かし、それぞれの道で社会に貢献して参ります。変化の激しい現代社会において、常に広い視野を持ち、周囲と協力しながら一歩ずつ前進していく決意です。

最後になりますが、私たちが本日こうして無事に卒業を迎えられたのも、多くの方々の支えがあってこそのものであります。学問の奥深さを教えてくださった先生方、多方面から支えてくださった職員の皆様。そして何より、今日まで私たちを信じ、一番近くで応援し続けてくれた家族に、心からの感謝を捧げます。

神奈川大学の益々の発展と、本日もご列席の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げ、答辞とさせていただきます。

2026年3月23日

卒業生代表

工学部 経営工学科 片山颯太